まちの歴史とくらし

神戸深江生活文化史料館

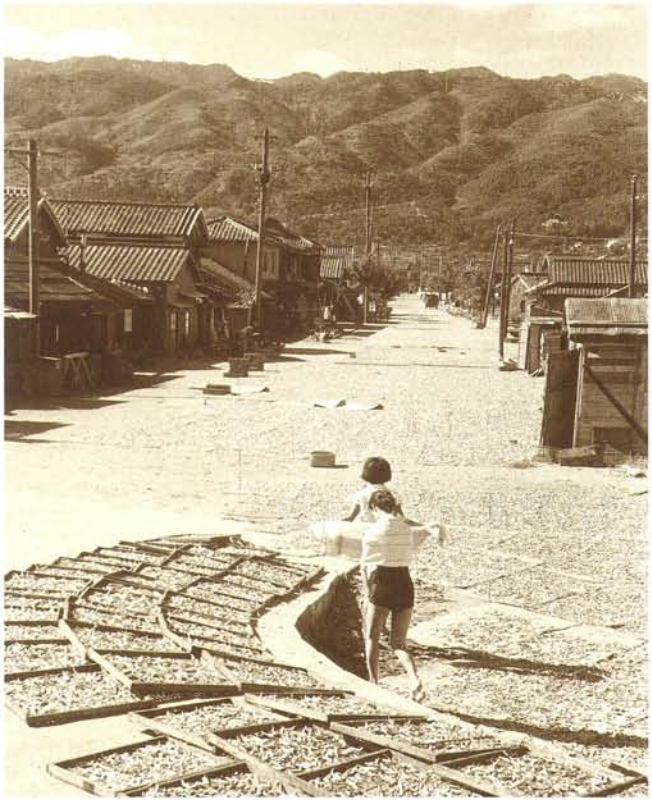
ごあいさつ

神戸市東灘区長
髙 橋 佳 子

東灘区は1950(昭和25)年に旧武庫郡の5ヶ町村（御影町、住吉村、魚崎町、本山村、本庄村）が神戸市と合併して誕生しました。深江地区は旧本庄村に属し、区内のもっとも東部に位置しています。

近世には、沿岸漁業を中心に水産物加工などの産業で栄えました。早くから経済的にも文化的にも開けた地域だったこともあり、人々の教養は高く、進取の気象に富んでいました。西洋文明のいぶきにふれる機会が多くなると、くらしを便利で豊かなものにしようと、積極的に海外の文物を取り入れてきました。一方で、地域の人たちが一丸となっておこなう産土の杜の祭礼に代表されるように、伝統的な生活文化を大切に受け継いでいます。

神戸深江生活文化史料館には、地元の人たちから寄贈されたたくさんの資料が展示公開されています。それらの資料から、私たちは地域に根ざしたくらしの諸相を知るとともに、祖先の人たちが過ごした「むかし」をしのぶこともできます。本書では、史料館が所蔵する資料の数々とともに、活動内容を紹介しています。私たちが生きてきたあかしを後世の人たちに伝えるメッセージのひとつとして活用していただきたいと思います。



神戸深江生活文化史料館が開設20周年の節目を越えて既に数年が過ぎました。史料館設置の根拠であり、20年来の懸案であった『本庄村史』は、2004年7月に「地理編・民俗編」を出版し、続く「歴史編」を近く刊行することによって完成します。

そこで、この機をとらえ、館蔵品の図録を完成しました。これまで図録としては1994年の発行の『特別展・打出焼ー藤川祐作コレクションー』があり、また小学生用の『まちとくらしのれきし』という簡単なパンフレットや一般用の『まちとくらしの歴史館』というリーフレットはありますが、館蔵資料や活動内容を総括的に紹介する図録の発行は今回が初めてです。

史料館の運営は、展示計画から出版物発行に至るまですべてボランティア・スタッフである館員に委ねられています。村史編纂事業の展開にともなって地域の皆様方からご提供いただいた大切な資料をこのような形で公開できるのも、館員の熱意と努力に支えられているからです。さらに、今回の図録発行には、史料館の設置者である深江財産区管理会の全面的理解があったればこそ実現できたものであることを付言し、ご関係の皆様にお礼申し上げます。

神戸深江生活文化史料館長
杉浦昭典

昭和30年代の札場筋のようす（左頁　左　喜多一晴氏撮影）
現在の札場筋（左頁　右）
史料館全景（右）

設置目的と機能

設置目的

神戸深江生活文化史料館は、本庄村史編纂事業にともなう収集資料の保管と公開、地域に所在する歴史遺産の保全と活用、さらに地域文化の継承を目的として設置された。

機能

展示公開　常設展示は、本庄地域の歴史と生活文化に関するさまざまなテーマのもとで、出土遺物、文献資料、民俗資料などにより構成している。また、期間を定めて特別展、企画展を開催している。

学校教育との連携　小学校３年生の社会科学習に定められている「地域とむかしのくらし」に則したプログラムを作成し、団体見学を受け入れている。中学校２年生の職業体験教育「トライやるウィーク」（平成10年度より兵庫県が実施）に協力し、博物館実務を指導している。

生涯学習の支援　地域の歴史や生活文化に関する講演会、研究会などを開催している。また、郷土の歴史と史跡に関する全国からの照会にできるかぎり対応している。

地域研究　地域の史跡や民俗行事などの歴史、現状、将来像を把握し、地域的特色に留意して記録保存につとめている。

出版　展示、調査、研究など史料館の活動に関連する定期刊行物のほか、図録、報告書などを随時刊行している。

神戸深江生活文化史料館と深江財産区

神戸深江生活文化史料館の設立母体である深江財産区は、地方自治法に定められた「特別地方公共団体」に該当する。独自の区有財産を保有し、公の施設（深江会館と史料館）を設けて運営している。昭和50年代に地方史への関心が高まる中、深江財産区管理会は『本庄村史』の編纂を決議し、刊行にむけて具体的な活動に着手し、地域の人たちと連携して活発な資料収集がはかられた。その過程で、江戸時代以来深江で医業をいとなんできた深山家から膨大な古文書と医療用器具・生活用具が寄贈された。

財産区管理会は、寄贈・収集資料を保管するために神戸・深江会館生活文化史料室を開設したが、その後も地域の人たちからの寄贈が相次ぎ、見学者も増加の一途をたどった。
1983（昭和58）年に神戸市の協力を得て施設の拡充が実現したのを機に、神戸深江生活文化史料館となり、同年10月30日に開館記念式典を開催して本格的な博物館活動を開始した。

沿　革

1950	昭和25年	兵庫県武庫郡本庄村が神戸市と合併し、東灘区に編入される
1980	昭和55年	深江財産区が村史編纂を呼びかけ活動開始
		地元の資料収集に着手
		旧深山邸の解体にともなう資料の寄贈
		収集資料の収蔵施設の建設を計画、竣工
1981	昭和56年	「神戸・深江会館生活文化史料室」オープン
		記念祝賀会を挙行
1983	昭和58年	神戸市の協力を得て施設を拡充
		名称を「神戸深江生活文化史料館」と定め、拡張オープン記念行事を開催
1984	昭和59年	兵庫県博物館協会に加盟
1987	昭和62年	調査研究会の発足、合議的運営体制に移行
1995	平成７年	阪神・淡路大震災の被害により休館
1996	平成８年	復旧・公開
2004	平成16年	『本庄村史 地理編・民俗編』刊行
2008	**平成20年**	**『本庄村史　歴史編』　刊行**

史料館拡張オープン記念行事

明治22年（1889）４月１日　東灘旧五ヶ町村の誕生
―は1889年以降の行政町村界、―は江戸時代以来の村境
［西平野は昭和４年（1929）に御影町に合併］

五ケ町村誕生時の地図（『うはらの歴史再発見』より）

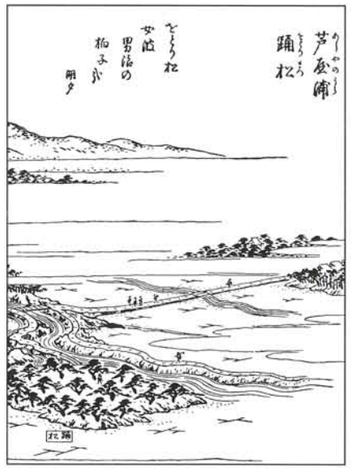
スタッフ

館　　長	大国正美
副 館 長	道谷　卓
事務局主事	阿部英子
研 究 員	有吉康徳
	髙田祐一
	樋口元巳
	藤川祐作
	水口千里

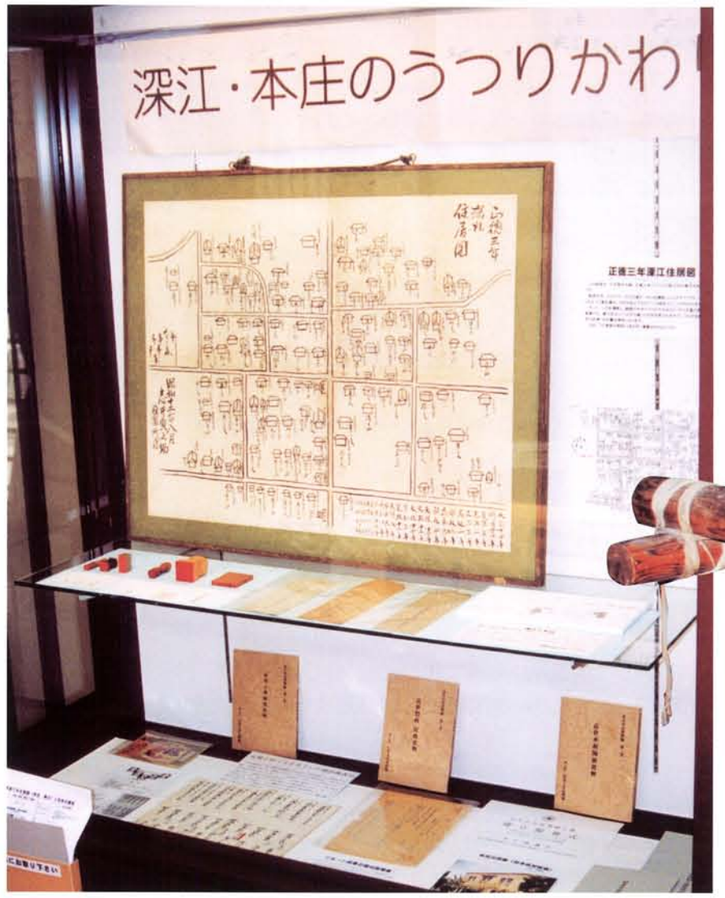
（2014年現在）

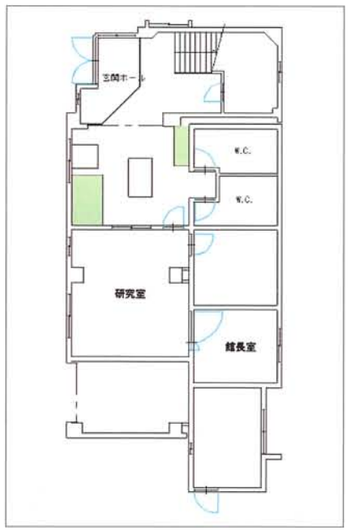
史料館の予定表

深江・本庄のうつりかわり

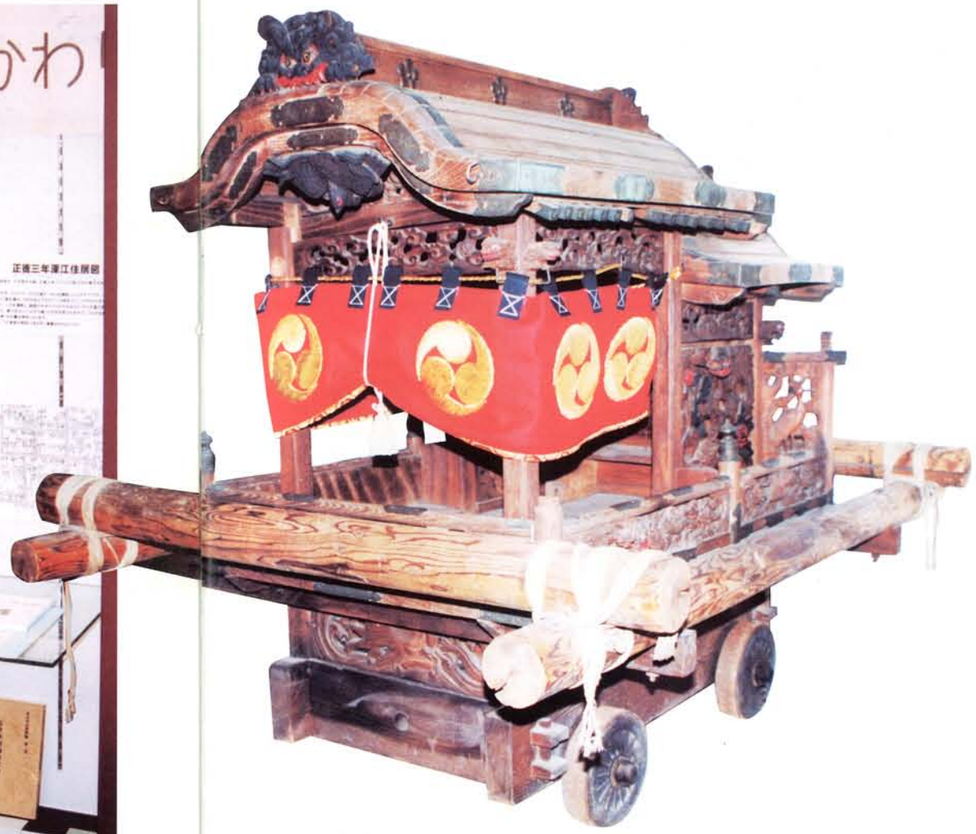


旧本庄村関連資料（右上）
『摂津名所図会』に描かれた深江（左上）
本庄村長印（左下）





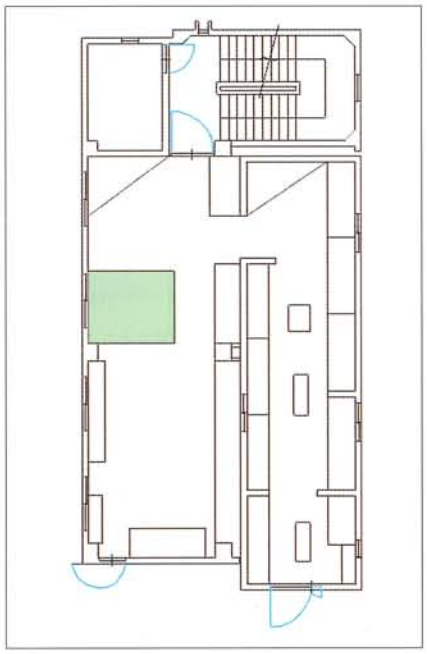
本庄村（深江・青木・西青木）が御影町、住吉村、魚崎町、本山村とともに神戸市と合併し、東灘区となるまでの歴史をたどる。江戸・明治時代の地図、旧本庄村役場で使用された各種公印、封筒などの資料と古写真、町村章、また町村名の由来解説パネルなどを展示している。
床の間を模した「季節展示コーナー」では、「正月の風景」「雛まつり」「端午の節供」「夏の風物詩」「お月見の風景」をテーマに展示している。



子ども用ミニだんじり（左上）
スケート（左下）
季節展示コーナーの展示例
「正月の風景」（右上）
「端午の節供」（右中）
「夏の風物詩」（右下）

いろりコーナー

いろりコーナー（右上）
ちゃぶ台（上）



昭和中頃までの生活がうかがえる家庭用品を中心に展示している。瀬戸内海に面した地域では「へっつい」または「おくどさん」と呼ばれるかまどが台所の火所であったが、ここでは、いろりを再現した「いろりコーナー」を設けている。四方に各々の座が設けられていて家族が集ういろりは、日本の家庭生活のシンボルのひとつであり、その様式は、ちゃぶ台が登場し、さらに洋風ダイニングキッチンへと変化していった現代家庭の食卓、団らん風景にも受け継がれている。
「むかしのくらし」を学ぶ小学校３年生の団体見学者のために、ちゃぶ台、水屋を配した茶の間には、鍋、釜などの調理具のほか、行灯、火のし、湯たんぽ、ハエ捕り器など、現代生活では見られなくなった民具も多く展示している。

羽釜

飯びつとふご

電気炊飯器

やぐらごたつ

安全こたつ

電気ごたつ

洗い張り用具

たらいと洗濯板

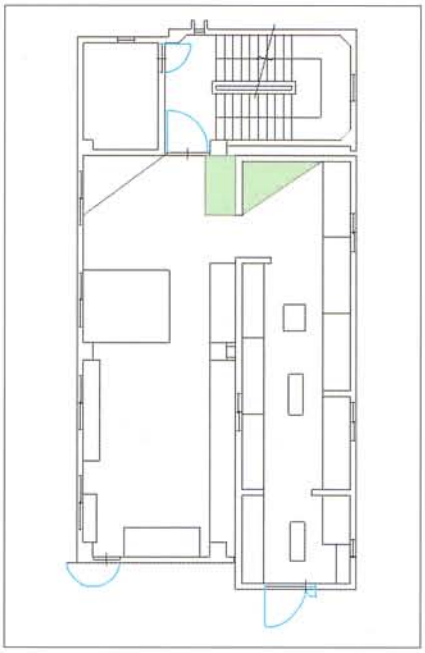
火のし

炭火アイロン

電気アイロン

深江の浜と漁

往年の地引網漁風景（上）
さまざまな漁具（右上）



深江は、近世には東灘近隣でも有数の漁業地帯であった。大規模なイワシ地引網漁に加え、打瀬網、テングリ（手繰）網、建網、ハエナワ（延縄）などを用いて漁がおこなわれていた。沖合の泥地ではスズキ、アカガイ、アナゴ、カレイなどの漁が中心となり、浜に近い砂地ではエビ、貝類などを獲っていた。

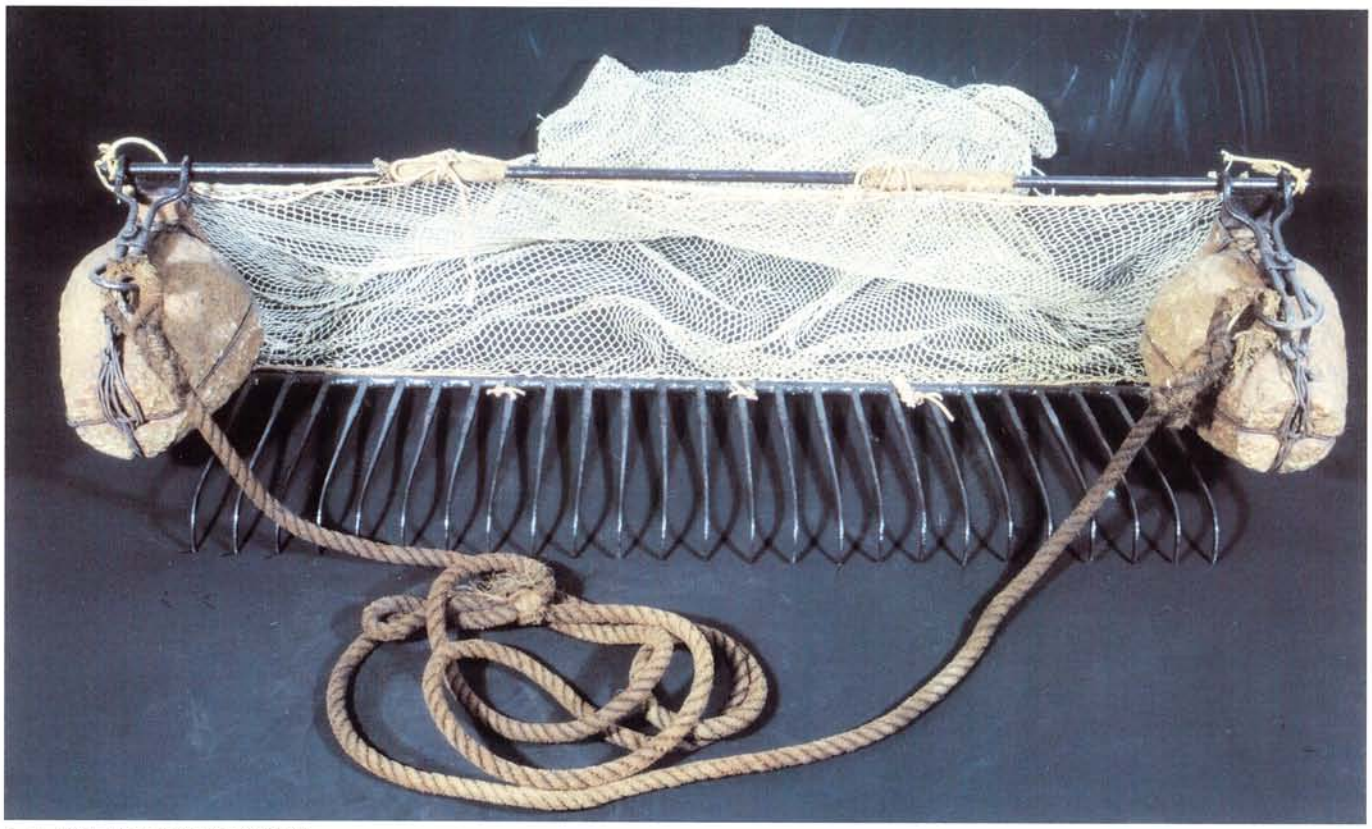
1964（昭和39）年に浜の埋め立てがはじまり、1972（昭和47）年には漁協も解散したが、残された漁具、網漁撈の復元模型、作業風景写真からは、往年の浜での営みを知ることができる。

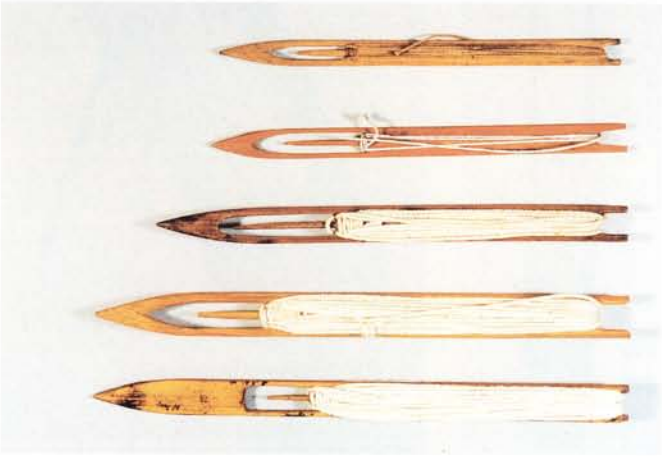
地引網漁で捕獲したカタクチイワシは、「煎屋」と呼ばれた業者がイリコに加工し出荷していた。水揚げから大小の選別、運搬、ゆで上げ、乾燥、取り込み、袋詰めまでの作業に使われた用具には、地方色豊かな名前がつけられている。

カタクチイワシ

イワシ加工用具

往年のイワシを運搬する様子（喜多一晴氏撮影）

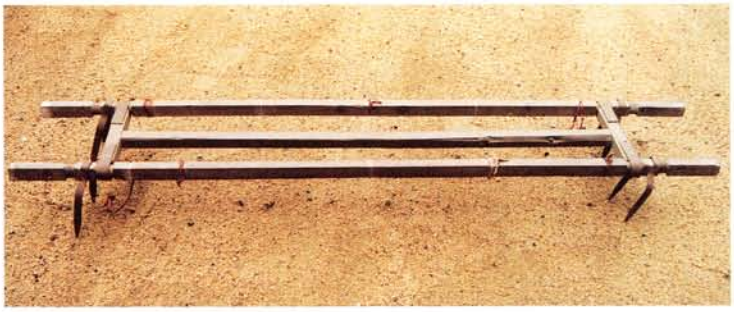

ケタ（芦屋市立美術博物館撮影）


網針

ジョレン

米作りの用具

大正以降、深江周辺では農家が激減し、現在は農具もほとんど残っていない。展示資料は他地域から寄贈されたものである。



さまざまな農具（上右）
牛の鞍（上左）

担い桶（左中）
田植え枠（右中）
水車（左下）
八反取り・回転除草機（下）
千石とおし（右下）

戦時下のくらし

灯火管制用電灯カバー（上）
ガーゼ・防衛食容器・防空頭巾　（中央上から）
第二次世界大戦中のくらしを物語る用具（右）

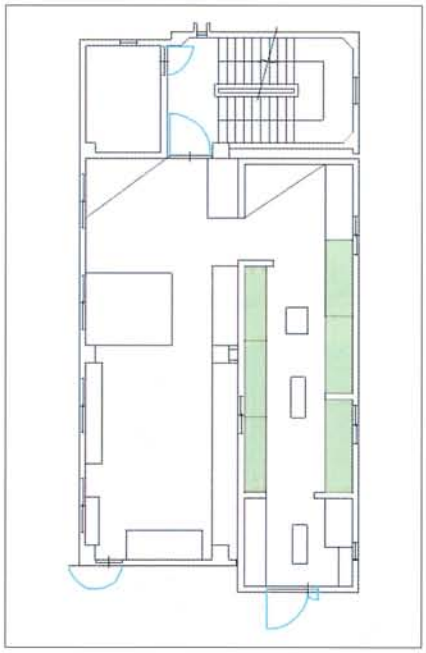
深江北町遺跡

深江北町の県営住宅改築工事にともなう発掘調査では、弥生時代末期の円形周溝墓と、奈良時代から平安時代にかけての集落跡や水田跡が確認された。調査主体の兵庫県教育委員会から借用した出土遺物と、あらたに製作した遺構の模型を展示している。

深江北町遺跡の出土遺物（右上）
円形周溝墓群復元模型（左上）
壺・鉢（右下）

深山家のくらしとモダニズム

旧深山邸スケッチ（左上）
小児用甚兵衛・産着（右上）
出産到来品控（左下）
深山家の雛飾り（右下）



館蔵資料の大半は、江戸時代から深江で医業を営んできた深山家から寄贈されたものである。

深山家の調度には、家紋である「鉄線」がほどこされた膳椀をはじめとする飲食器類、提灯など、医家の格式を示すものが多い。紋付や宮参り着などの着物、玩具類も豊富である。同家に伝世していた文書の7割は医療や医学関係資料であるが、通過儀礼、年中行事、信仰、教育など生活にかかわるものも含まれている。

深山家から寄贈された資料をはじめ館蔵資料の中には、明治、大正時代にはぜいたく品だったカメラや映写機などもあり、この地域の経済的豊かさを物語っている。

宮参り着

宮参り用帽子

家紋入り提灯

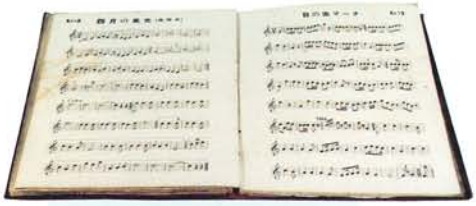
祝儀膳

酒燗器

化粧用具

ラジオ　蓄音機

映写機と35 mm フィルム



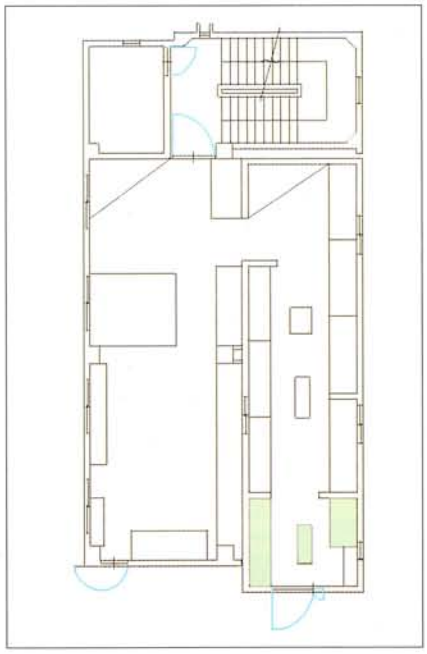
ハーモニカと楽譜

絵具

台所ミニチュア

深山家医事資料

接痘録・種痘性名録（左上）
深山医院印鑑（中）
医療具・文書（右上・右下）

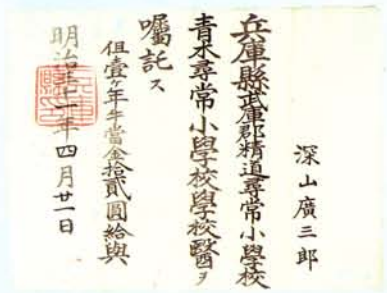


深山家が深江で開業したのは、文化年間（1804～18）のことだったといわれている。3代目の玄石は、大坂の原老柳の門下生となり、当時まだめずらしかった種痘法を学び、1867（慶応3）年に大阪種痘館から免許状を授与された。4代目の玄碩は、父の死後、1870（明治3）年に神戸病院付属医学伝習所に入学し、近代西洋医学を学んだ。手術着、手術着用袋、上皿天秤、外科手術用具、顕微鏡、血圧計、検眼用レンズ、消毒用機器などのほか、慶応から明治にかけての種痘免状、種痘性名録、種痘比較表などは、深山家が早くから西洋医学や種痘接種にかかわってきたことを示している。近世からの診療記録、軍医としての従軍記録、学校嘱託医の記録、講義ノートなどもある。

種痘免状

上皿天秤

医師かばん



校医委嘱状

上皿天秤

検眼用レンズ

外科手術用具

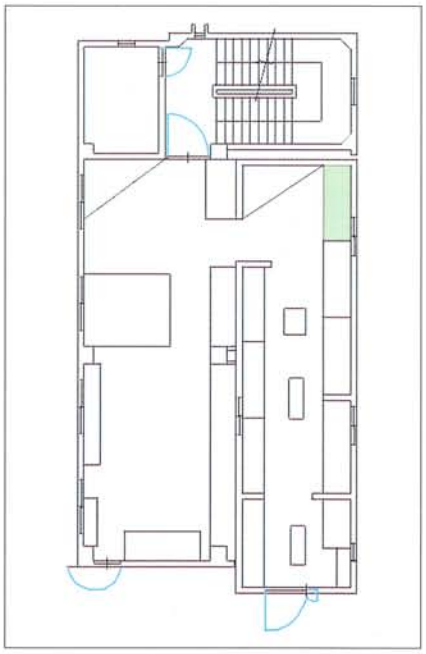
薬箱

顕微鏡

外科手術用具

深江のまつり

だんじり（左上）
だんじり引き幕（右上）
だんじり曳き（右下）



深江では、古来、森稲荷神社を氏神としてきた。同神社の卯の葉まつり（例大祭）は、かつては5月19日に宵宮、20日に本宮をとりおこなってきた。みこしは、青木など氏子の間で交代でかついでいた。

宵宮の日は、地元のだんじりが地区内を練り歩き、夕刻に宮入りした。本宮では、みこしが宮入りしていただんじりを従え、森稲荷神社から稲荷筋をとおり、大日霊女神社境内のお旅所まで渡御した。そのあとは八坂神社を抜け、その年のみこしをかつぐ地区をまわった。みこしは夕刻神社に戻り、まつりを終える。

卯の葉まつりは、今は5月3日、4日に実施されている。

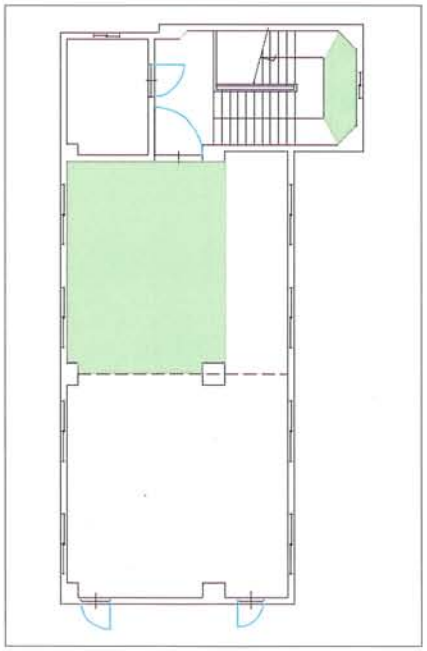
旅と修験

近世以来、深江では男性が大峯山本堂へ修養登山をするために「深栄講」を結成していた。行をする日は、家族は精進料理を食べて無事を祈った。深江に戻れば必ず大日霊女神社に参拝し、海までの道に一列にならんで横たわった家族をまたいでその健康を願う風習もあった。「深栄講」は終戦後に途絶えたが、大日霊女神社境内には、1922(大正11)年に玉垣を建立した際に「深栄講」から100円を奉献したことを記念して建てられた石碑がある。

修養登山に向かう少年のいでたち　大正10年撮影（上）
数珠と鉦（左）
深栄講の装束（右）

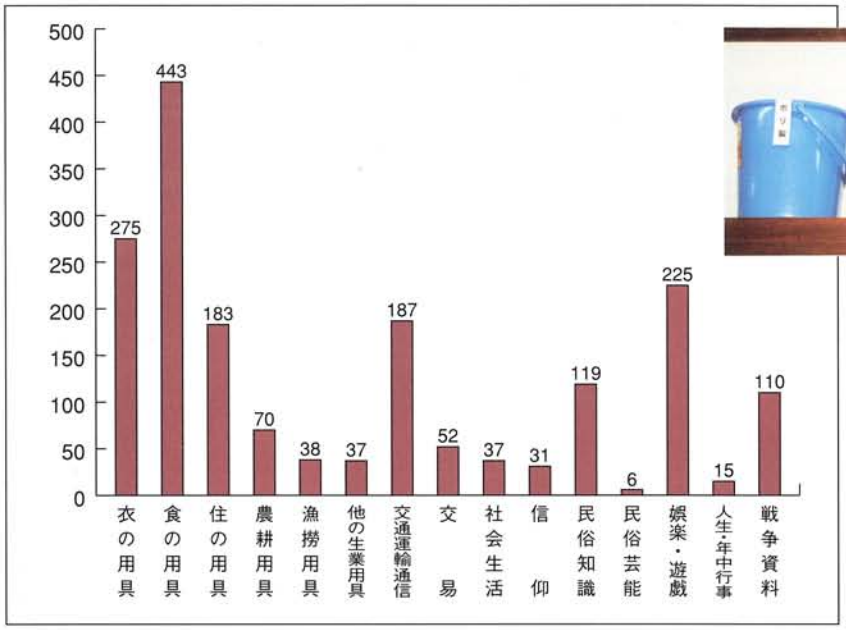
3階特別展示室

3階のクリオルームでは、特別展、企画展、講演会、研究会などを開催してきた。阪神・淡路大震災以降は被災地から救済した資料を保管する収蔵庫として使用されていたために、それらの行事は休止を余儀なくされていた。しかし、2004(平成16)年に展示スペースを一部復活した。



民俗資料

深江の資料を中心に、近隣の地区からも収集活動をおこない、おもに近代以降のくらしを支えた用具の収蔵の充実をはかっている。収蔵資料は2004年現在1828点である。

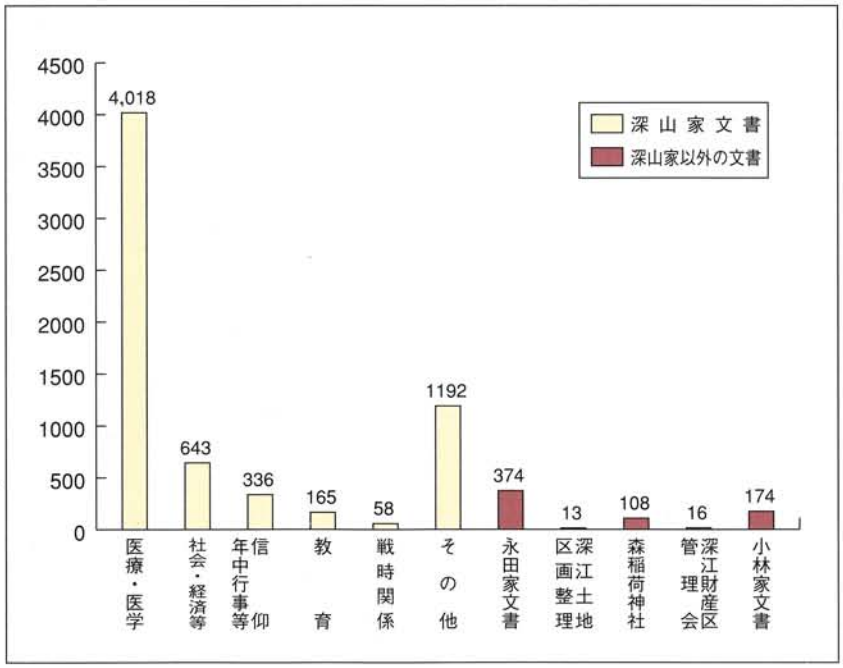


バケツのいろいろ

糸巻き

文献資料

深山家文書6419点を中心に、7097点の古文書を整理し収蔵している。深江で近世後期から酒造業を営み、近代では村会議員を務めた永田家の文書、震災時に救出した小林家文書などがある。



1841（天保12）年煎（いり）屋株譲り渡し証文（永田家文書）

深山家古写真コレクション

深山家には多数のガラス乾板写真が残されていた。1902（明治35）年生まれの杲氏はとくに写真に関心があったといわれている。撮影時期、場所、撮影者が不明なものも多いが、残されていた写真からは、昔日の様子がしのばれ興味ぶかい。

特別展・企画展

特　別　展

史料館拡張オープン記念「人のくらしと植物展」
1983年10月30日～12月25日

史料館開設3周年記念「学習まんが源平の戦い原画展」
1984年4月28日～5月6日

「東神戸の考古展ー藤川祐作土器・石器コレクションー」
1984年7月22日～9月22日

「深江北町遺跡展ー弥生時代の深江史ー」
1987年5月2日～31日

「戦時下の生活文化史
　ー苦しかったあの頃を今ここに再現するー」
1987年8月1日～9月27日

「近代の着物に見る生活史」
1988年4月30日～5月29日

「東灘の歴史展ー神戸市制100周年を記念してー」
1989年4月29日～6月25日

「昔の農具展ー農具から見る先人の生活の知恵と工夫ー」
1989年10月7日～11月26日

「ザ・ひがしなだーわが街の足跡をたどるー」
1990年4月28日～9月2日

「さかなをとるー深江の漁業をたずねてー」
1991年10月1日～3月1日

「打出焼ー藤川祐作コレクションー」
1994年10月22日～（阪神・淡路大震災以後中止）

企　画　展

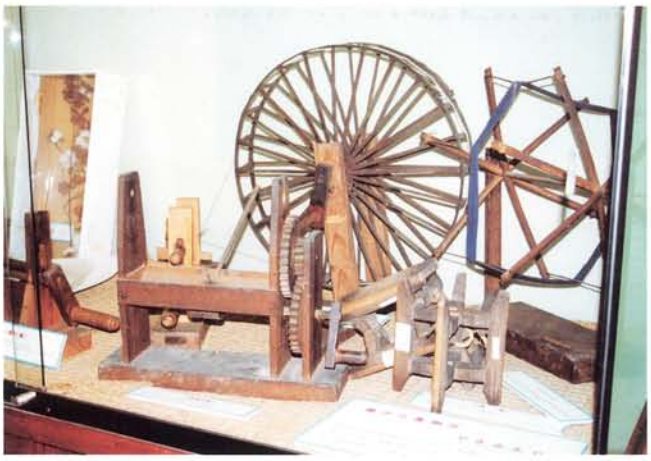
「綿から着物ができあがるまで」
1988年4月～7月

「旧本庄村の石造遺物の拓本」
1993年7月～5月

「史料館周辺でおこなわれた発掘調査」
1993年12月～1994年4月

「戦争資料展」
1994年8月～12月

「深江のまつり」
1994年12月～（阪神・淡路大震災以後中止）



「六甲南麓の水車ー遊・水車ー」
1996年10月～1997年3月

「結び」
1998年1月～4月

刊行物

機　関　紙

「生活文化史ー史料館だよりー」
年１回発行

「歴史研究手帖」
季刊（休刊中）

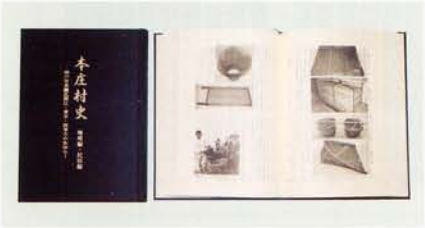
パンフレット・図録

「まちとくらしの歴史館」
一般用パンフレット

「まちとくらしのれきし」
こども用パンフレット

「特別展図録　打出焼ー藤川祐作コレクションー」
1994 年発行

単　行　本



『本庄村史ー地理編・民俗編』
2004 年　本庄村史編纂委員会編集・発行

『神戸の歴史ノート』　田辺眞人編著
1985 年　改訂版発行（品切れ）

資料集・目録

『近世土地制度史料』
1985 年発行

『近世農政・民政史料』
1987 年発行

『近世水利関係史料』
1991 年発行

見　　学

学校行事への協力として、小学校３年生の団体見学の受け入れは、開館時から続けている。当初は地元の小学校数校だけであったが、現在では年間20校以上となり、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区と見学校の所在地も範囲が拡がっている。この見学はおもに、社会科のカリキュラムの中に設けられている地域学習と昔のくらしの学習に対応する校外学習としておこなわれるものである。史料館では、子ども用パンフレット「まちとくらしのれきし」を作成、配布し、見学当日は研究員が解説をおこなっている。

●小学校団体見学者数

トライやるウィーク

兵庫県では子どもたちの「心の教育」の充実をはかるため、公立中学校２年生を対象に体験を通して子どもたちが地域から学ぶ「トライやる・ウィーク」推進事業を平成10年度から実施してきた。地元本庄中学校の依頼に応じて、平成11年度より２人を受け入れている。台帳カード作成、撮影、画像処理、展示など史料館の館員としての基礎的作業の体験実習を実施している。

学術団体との交流

行政機関・生涯学習機関との交流

大学・博物館との交流

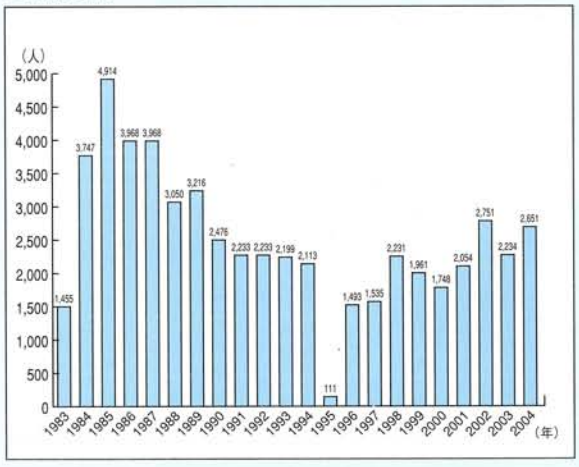
地元での学術団体主催の各種講演会、研究会などの開催にあたり、会場設営、進行などが円滑にすすむよう協力している。

生涯学習への協力として、研究員が市民講座、婦人大学などの講師をつとめ、展示解説や近隣の史跡見学などを通じて、地域文化への理解を深める機会をつくっている。

行政機関に対しては、「東灘区・大学のまちづくり連絡会議」の構成メンバーとして同会議に参加し各種提言を行っている。そして、神戸市が策定する「東灘区・区別計画（マスタープラン）」の主要プロジェクトのひとつである「大学と地域の融合をめざすまちづくり」を実現するための主要施設として、大きな期待が寄せられている。また、東灘区の新規採用職員の研修期間には、施設見学を受け入れている。

大学などの教育機関との連携では、博物館学、博物館実習、民俗学などの講座を開設している大学からの要請に応じて、担当教官引率のもとでの施設見学の受け入れ、博物館業務に関するガイダンス、地域史跡の紹介などをおこなっている。さらに、神戸大学や神戸市文書館などと古文書の共同調査を実施するなど、教育機関と協力し地域文化の保存につとめている。

●来館者数



遺　　跡

深江北町遺跡（深江北町２丁目）

県営住宅の改築工事に先立って、1984（昭和59）年、1986（昭和61）年に兵庫県教育委員会が実施した発掘調査で確認された遺跡である。弥生時代末期の11基に及ぶ円形周溝墓群からは、供献土器、壺棺なども出土し、弥生時代の方形周溝墓から古墳に移行する直前の墳墓の発見として注目を集めた。1987（昭和62）年には、円形周溝墓群の縮尺40分１の模型を作成し展示している。また出土遺物の一部も兵庫県教育委員会から借用し常時展示している。

寺社と関連史跡

大日霊女神社（深江本町３丁目）

文明年間（1469～1487）に、薬王寺という真言宗の寺の住職が蓮如に心服して浄土真宗に改宗し、本尊を阿弥陀如来に改めた時、旧本尊を村人が祀ったのが創建だとされている。地元では「大日つぁん」と呼ばれ大日霊女尊を祭神とする氏神である。

正寿寺（深江本町３丁目）

薬王寺が浄土真宗に改宗された時に延寿寺と名を改めたが、1633（寛永10）年に深江の永井三左衛門が出家し、永井山正寿寺とした。

森稲荷神社（森北町４丁目）

社伝では715（霊亀元）年卯月卯日の夜、深江の浦に光が現れ、稲荷の神霊であり山手の森に祀られたいと告げた。以来、神の漂着の日に「卯の葉まつり」をおこなってきた。保久良神社とともに本庄９カ村（深江・青木・森・北畑・田辺・小路・中野・三条・津知）の総社であったが、1872（明治5）年に保久良神社と氏子を分け、深江、青木、森が氏子として残った。

踊り松の碑（深江本町４丁目）

『摂津名所図会』には深江本町の広い範囲にまたがる松林として描かれている。森稲荷神社の神霊がたどりついた松として伝えられており、卯の葉まつりに氏子たちが周りで踊ったため、松の枝ぶりが踊っているように見えるためなど、「踊り松」の名前のいわれは諸説ある。1982（昭和57）年に神戸商船大学開学30周年を記念して「踊り松の碑」が建てられた。

往　還

稲荷筋（いなりすじ）

阪神電鉄の深江駅東を南北に走る道路を、地元では稲荷筋と呼んでいる。森稲荷神社の「卯の葉まつり」の日にお旅所の大日霊女神社まで、みこし行列が通った道である。森稲荷神社の氏子は、深江、青木、森地区で、毎年交代でみこしを担いだ。各地区に一台ずつ所有されているだんじりも、みこしにしたがって稲荷筋を練り歩く。

魚屋道（ととやみち）

魚屋道は、古くからの六甲越えの道である。江戸時代には芦屋、西宮宿、小浜宿（宝塚市）を通る正規ルートを使わずにすむ最短の道であった。明治中頃に住吉駅が完成し、新しいルートができた後も深江の浜で獲れた魚を有馬に運ぶために使われていた。1982（昭和57）年に、昔の道標を模した碑がつくられた。

記　念　碑

旧本庄村役場跡の碑（青木４丁目）

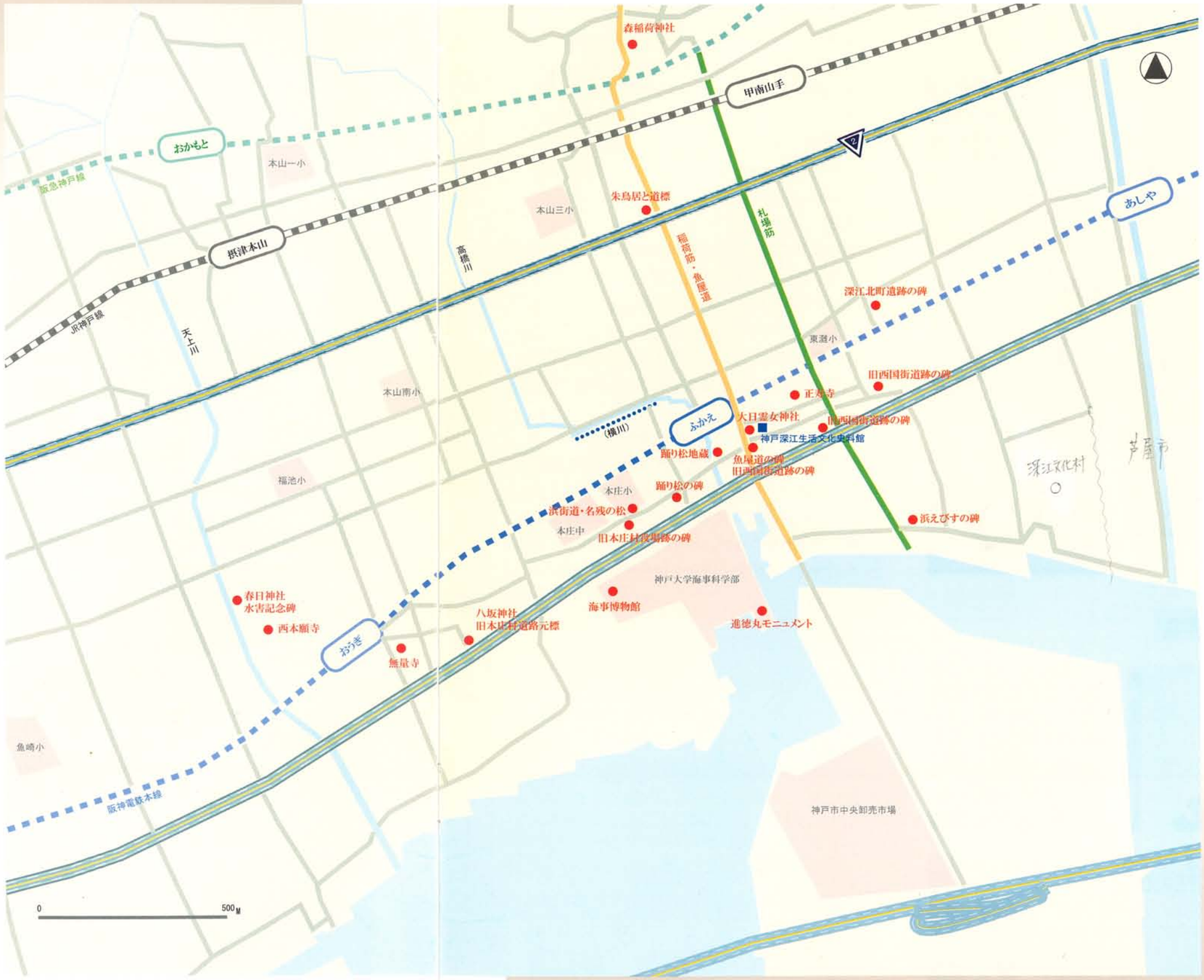
鉄筋２階建ての本庄村役場は1929（昭和4）年に完成した。神戸市と合併した後は区役所の出張所となり、その後も公民館として地元の人たちに親しまれてきた。1992（平成4）年、老朽化により解体され、記念の碑が建てられた。

追憶の練習船

進徳丸

1923（大正12）年に建造された進徳丸は、４本マストの帆船で神戸高等商船学校練習船として毎年２回の遠洋航海をおこなっていたが、第二次大戦中に２本マストの汽船に改装され、戦争末期、播磨灘で米軍機の空襲により半ば海没擱座した。戦後、引き揚げ修理して沿岸航海の実習訓練に従事した後、1968（昭和43）年に母校旧地の神戸商船大学（現神戸大学海事科学部）構内に固定設置して一般公開されたが、震災で大破し解体撤去された。跡地には船体・機関の一部を残して設置した進徳丸モニュメントがある。

ふかえ周辺史跡MAP



もっと深江を知りたいあなたへ

『日本史の中の東灘』
道谷卓著　1989年　神戸市民文化振興財団・東灘文化センター
『ザ・ひがしなだ－東灘の歴史の足跡をたどる－』
道谷卓・望月浩・望月友二編著　1990年
神戸深江生活文化史料館友の会
『新　神戸の町名』 神戸史学会編
1996年　神戸新聞総合出版センター
『東灘歴史散歩』 田辺眞人　1998年　東灘区役所
『うはらの歴史再発見－ちょっと昔の東灘－』
道谷卓編著　2000年　東灘区役所まちづくり推進課・東灘区役所
『本庄のうつりかわり』 2000年　本庄小学校
『東灘歴史掘り起こしマップ』
道谷卓監修　2002年　東灘区まちづくり推進課

ツアー・見学会

「神戸深江生活文化史料館友の会」は、1981(昭和56)年2月21日に、神戸・深江生活文化史料室の開設にともない発足した。以来、史跡散策、見学バスツアー、講演会の開催、また「友の会だより」(会員連絡誌、後に「友の会通信」と改称)の発行など、多岐にわたる活動により、史料館の運営を支援してきた。発足当時の会員数は約50名だったが、最盛期には500名を超えた。

友の会が主催した例会は「灘の酒蔵を歩こう」(1981年4月12日)以来92回をかぞえる。なかでも「魚屋道を歩く会」は好評を博し、1982(昭和57)年以来10回実施されて、毎回多くの会員が参集した。これは、深江の浜から有馬まで六甲山を越えて海産物を運んだ道を徒歩でたどるものだった。

1995(平成7)年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により会員の多くが被災し、史料館も被害を受けて休館を余儀なくされたことなどから、友の会は同年7月に解散して14年間の活動に終止符をうった。しかし、地域の復興が進んだ今日、友の会の復活を望む機運がたかまっている。

講演会・研究会

利用案内

史料館のシンボルマーク
深江の漁業を象徴する網
縄と豊かなくらしを示す
漆器椀を配しています

開館日	土・日曜日（祝日は休館）
開館時間	10：00～16：30
入館料	無料
アクセス	阪神電鉄「深江駅」下車南すぐ
所在地	〒658-0021　神戸市東灘区深江本町 3-5-7
電話＆FAX	078-453-4980

表紙資料写真

紅皿	カメラ	箱枕
色鉛筆	ハエ捕り器	白粉刷毛
大小暦	レジスター	重箱

裏表紙資料写真
背守りのサルの人形をつけた
祭礼法被（部分）

深江会館のご案内

史料館に隣接する深江会館は、会議や催事などにご利用いただけます。詳細は下記にお問い合わせください。

休館日：水曜日・祝日
所在地：〒658-0021
神戸市東灘深江本町
3-5-7
電話＆FAX：078-411-0475

まちの歴史とくらし

執筆・編集　水口千里
資料写真撮影　藤川祐作
発行年月日　2005年3月30日
発　　行　神戸深江生活文化史料館
〒658-0021
神戸市東灘区深江本町 3-5-7
TEL.＆FAX.078-453-4980
印　　刷　神戸カム株式会社